EBCCチャータースクールにおけるサービスラーニングについての研究

—生活科・総合的な学習の時間における地域社会への参加の充実のために—

太　町　　智

（愛知教育大学大学院　教育学研究科）

A Study of Service-Learning in EBCC Charter School

Satoshi OHMACHI

(Graduate Student, Aichi University of Education)

Ⅰ　はじめに

日本では，具体的な体験や活動を通して学ぶ「生活科」に続き，「総合的な学習の時間」が導入されたことにより，子どもたちが多様な人々とかかわりながら，様々な形で地域社会に参加する機会が増えつつある。特に，総合的な学習の時間においては，環境教育やボランティア活動など，子どもが地域社会に直接参加する機会は確実に増加している。

総合的な学習の時間については，2003年12月の学習指導要領の一部改正において，教科等との関連付けについて新たに目標に加わった。また，生活科についても，小学校学習指導要領において，他教科等との関連を図り，指導の効率を高めるようにすることが配慮事項として示されている。このように，生活科，総合的な学習の時間のどらにおいても，どのように教室での学習と関連付けるかが注目される必要がある。しかし，このような活動が，教科学習を中心とする教室での学習との関連に配慮して行われているとはいえないのが現状である。つまり，多くの場合，教室での学習と地域社会への参加は，関連性がなく切り離されて扱われているといえる。

アメリカ合衆国では，以前から「コミュニティサービス」[1]と呼ばれる，ボランティア体験，福祉体験，インターンシップ体験などの社会体験を学校の教育活動の一環として行う社会参加活動が，1990年代初頭から推進されてきた。しかし，その普及の一方で，1990年代半ばになると，強制労働と同じであるという批判や，授業としての意義や工夫が不十分であるという批判を受けるようになった。こうした批判を受け，アメリカ合衆国ではサービスラーニング(Service-Learning)が登場した。サービスラーニングとは，「学習を充実させ，市民的な責任を教えるとともに，地域社会をよりよくするために，コミュニティサービスとアカデミックな学習とを統合する教授と学習のアプローチ」[2]である。日本においても，総合的な学習の時間との関連について既にいくつかの先行研究がある[3]。また，市民的な責任を教える市民性の教育についても，社会科や道徳教育の領域において部分的に実践されている。しかし，これらの先行研究や実践では，地域社会への参加と教室での学習とを関連させることや，生活科における地域社会への参加の在り方についてはほとんど論じられていない。これらに関して，サービスラーニングから得られる示唆は大きい。

そこで，本小論では，カリフォルニア州のEBCC(East Bay Conservation Corps)チャータースクール[4]で実際に取り組まれた実践をもとに，プロジェクトやその評価ついて検討し，生活科や総合的な学習の時間における地域社会への参加の在り方について考究する。

Ⅱ　サービスラーニングの特徴

アメリカ合衆国では，1990年ごろから，様々な組織によって，サービスラーニングの定義や，その質に関する基準が開発されてきた。その結果，現在，多種多様なサービスラーニングの定義が存在し，実践されている。

EBCCチャータースクールでは，サービスラーニングについて，子どもたちが地域社会の「本物のニーズ」に，アカデミックな知識や技能を適用することとることで取り組む教授方法として理解している。これまで，EBCCチャータースクールでは，サービスラーニングの質を高めるために，サービスラーニングの「本質的な要素」について研究し，まとめてきた。そこで確認されたのが，以下の「質の高いサービスラーニングの７つの要素」である。

- **統合的な学習**(Integrated Learning)

サービスラーニングのプロジェクトは，知識や技能について明確に表現し，そのサービスは，アカデミックな学習内容を与え，そして，教室での学習は，そのサービスに情報を与える。

- **質の高いサービス**(High Quality Service)

サービスは，地域社会によって認識された現在の地域社会のニーズに対応する。そして，生徒や地域社会にとって意義のある利益を得るために，年齢に応じた，よく組織化されたサービスを実践する。

- **協働**(Collaboration)

サービスラーニングのプロジェクトは，プロジェクトに貢献したり，プロジェクトから利益を受けたりするすべてのパートナーとともに，生徒，親，地域社会に密着した組織のスタッフ，学校の管理者，サービスを受ける人などの間の協働である。

- **生徒の声**(Student Voice)

生徒は，積極的にサービスのプロジェクトの選択や計画，振り返りのセッション，評価とお祝い，年齢に応じた役割や課題を引き受けること等に参加する。

- **市民的な責任**(Civic Responsibility)

サービスラーニングのプロジェクトは，生徒の，他者をケアする責任や地域社会に貢献する責任の発達を促進する。生徒は，そのことによって，どのような方法で地域社会に影響を与えることができるか理解する。

- **振り返り**(Reflection)

振り返りは，サービスラーニングのプロジェクトの最後だけでなく，前半や中間など，あらゆる場面に生じ，生徒のサービスの経験とアカデミックなカリキュラムの間のつながりを確立する。

- **評価**(Evaluation)

評価は，プロジェクトの学習目標やサービスの目標に向けての進歩を測り，すべてのパートナー，特に生徒がサービスラーニングの評価にかかわることを求める。[5]

これらは，サービスと学習の質を高めるための重要な要素であるといえる。

また，EBCCチャータースクールでは，サービスラーニングに図１のような一連の構造が与えられている[6]。このような構造は，アメリカ合衆国の他の学校でも類似した実践が行われており，サービスラーニングの基本的な学習過程といえる。これは，サービスラーニングを初めて実践しようとする教師にとって有効な指針であろう。

しかし，サービスラーニングの実践にあたって留意しなければならないことは，これらの５つの段階は一見直線的な過程を示しているが，それぞれの段階が本質的に，密接に結びついているということである。

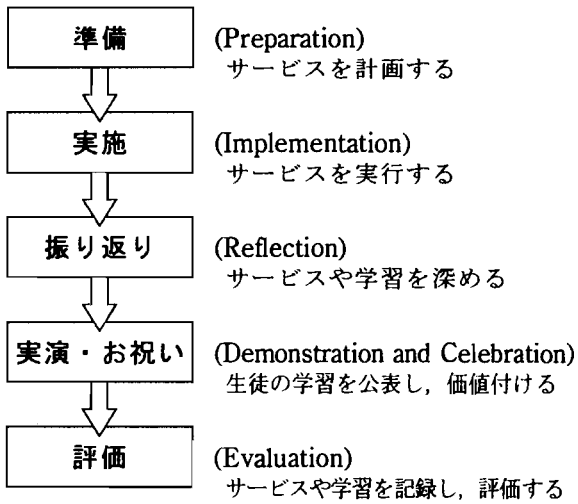

図１　サービスラーニングの学習課程

Ⅲ　サービスラーニングのプロジェクト

既に述べてきたように，サービスラーニングの定義は広く，これまでに様々な実践が行われてき

た。ここでは，実際にEBCCチャータースクールで実践されたサービスラーニングのプロジェクトについて紹介するとともに，その特徴について述べることにする。

EBCCチャータースクールには，就学前の学年（幼稚園段階）の子どもから，第５学年の子どもまでが在籍し，それぞれの学年段階でサービスラーニングに取り組んでいる。

ここでは，幼稚園の「バディーリーディングプロジェクト」[7]について紹介する。この実践は，幼少期の子どもたちがどのような形で地域社会に貢献したか，また，年長の子どもたちや国境を越えた子どもたちとどのようにかかわったかについて明らかにしている。これは，日本の生活科や幼小連携の在り方に示唆を与える実践である。なお，それぞれの実践には，教師が実際に作成した「カリキュラム単元表」を付した。

幼稚園：バディーリーディングプロジェクト

バディーリーディングとは，異なる学年段階の子どもたちがバディ（仲間）としてペアを組み，互いに本を読んだり，一緒にゲームをしたりする活動である。

教師は，第２学年や第４学年の教師と提携し，継続的なバディーリーディングプロジェクトを実施ることにした。幼稚園の子どもたちは，最初の数ヶ月の間，年長の子どもたちと一緒にバディーリーディングに参加したが，その後，このプロジェクトは，学校の近くにある託児所にまで広げられた。幼稚園の教師は，子どもたち自身が，就学前の子どもにとっての良い役割モデルとなることを目標として，託児所のスタッフとパートナーとなった。

教師は，パートナーとなった第２学年，第４学年の教師とのミーティングを行い，バディーリーディングプロジェクトの学習の焦点を，文字の識別，音声学の活動，言葉遊びに関するリテラシーの発達に合わせ，アカデミックな学習を促進した。数ヶ月後，プロジェクトは『はらぺこあおむし』をきっかけにした遊びをしたり作品や舞台衣装を作ったりする，別のプロジェクトにまで影響を与えた。このプロジェクトは，もともと植物について学び，託児所の庭をよりよくつくり直そうとする「託児所のガーデニング」のプロジェクトであったが，幼稚園の子どもたちは，このプロジェクトに，託児所の子どもたちと庭についての本を一緒に作る活動を加えた。

その後，このプロジェクトは，エクアドルの姉妹校と提携して行われる次のバディーリーディングのプロジェクトへと発展していった。

EBCCチャータースクールでは，カリフォルニア州の内容基準をサービスラーニングのプロジェクトに統合する一方で，それぞれの単元は，子どもたちの市民的なリテラシーの育成をサポートするために開発されてきた。カリキュラム単元表からもわかるように，どの学年段階においても，身につけさせたい市民性だけでなく，学ばせたい知識や技能と州の内容基準における位置付けを明確にしている。このことは幼稚園段階でも同様であり，例えば本の作成や編集を通して言語的な能力や数学的な能力を育てることといったアカデミックなリテラシーの育成が盛り込まれている。既に述べたように，生活科においても，学習指導要領において，他教科等との関連を図ることを配慮事項として掲げているが，地域のサービスに参加することを通して，他教科等で身につけた知識や技能を活用しながらより深い学習ができると考えられる。

また，地域社会のパートナーとして，かかわらせたい人的，物的なリソースが示されている。幼稚園段階においても学校外のパートナーとかかわっているのは注目すべき点である。生活科においても，できる限り多様で広範な地域社会へのかかわりが望まれる。

EBCCチャータースクールでは，「バディーリーディングプロジェクト」を学校の中心的なプロジェクトとしている。このプロジェクトの活動は，学校全体の取り組みを越えて，近所の託児所や国外の姉妹校にまで広がっている。異年齢の子ども同士で学ぶことは，年長の子どもにとっても年少の子どもにとっても価値があるが，異なった文化や異なった場所で生活する人々について学ぶことで，彼らは次第に相手を尊重する態度を身に

サービスラーニングのカリキュラム単元表

学年	クラステーマ
幼稚園	養育と成長

サービスラーニングプロジェクトの説明

バディーリーディングプロジェクト
・幼稚園児は第４学年の生徒とバディの相談相手やチューターとしてペアになる。
・幼稚園児は，近くの託児所の就学前の生徒と，バディとして行動し，幼稚園児が，彼らが第４学年の生徒から学ぶモデルとなるリーダーシップ技能を実践する，よく似た関係をつくる。
・幼稚園児は，託児所の庭で活動するために，庭をつくり直したり，種を発芽させたり，庭についての本を作ったり，庭について託児所の就学前のバディに教えたりすることで，バディーリーディングプロジェクトを広げる。
・幼稚園児は，地域の図書館で開かれる，『はらぺこあおむし(*The Very Hungry Caterpillar*)』に基づく共同体の劇を演じる。

目標

バディーリーディングプロジェクトを通して，生徒は：
・文字や言葉を識別したり，音声学を発達させたりする。
・自分自身や互いをケアする方法を学ぶ。
・彼らがどのように地域社会に貢献することができるかについて学ぶ。
・肯定的な役割モデルになるための方法について学ぶ。

地域社会との接触と責任

・ゴールデンゲート託児所：バディーリーディングプロジェクトのためのパートナーシップを提供する
・EBCC チャータースクールの第２学年および第４学年のクラス：相談相手となるバディを提供する

カリキュラムとのつながり(内容基準と結びつく知識および技能)

知識	内容基準
□国語／文学	
生徒は，託児所の教師の指示に従って文字の識別のゲームに参加する。	言葉の分析，流暢さ，系統的な語彙の発達：生徒は文字，言葉，音声について知る。
生徒は植物について学び，知識をガーデニングの単元に応用する。	読解力：生徒は，読んだり聞いたり見たりしたことで，基本的な事実やアイデアを確認する。
生徒はバディリーディングに取り組む。	文学的な応答と分析：生徒は良く知られているキャラクターやテーマ，筋書き，場面などに基づいたストーリーを聞いたり応答したりする。
幼稚園児と第４学年の読むバディは，バディリーディングで短いストーリーを編集する。	書くことや，口頭英語のきまり：生徒は標準的な英語のきまりの駆使能力で書いたり話したりする。
生徒は，自分たちが学んだことについての非公式な振り返りや議論に取り組む。教師は生徒に「バディでいることについて，何が難しいですか」といった質問を尋ねる。	聞いたり話したりする方略：生徒は口頭のコミュニケーションに耳を傾けたり応答したりする。生徒は情報やアイデアを共有し，完全な筋の通った文章で聞こえるように話す。
生徒は雑誌(ジャーナル)を書く。幼稚園児は，それぞれの生徒が１ページ書くというようにして本を編集するために，第４学年の生徒と協働する。	書く方略：生徒は，言葉や読みやすくて短い文章を書く。
知識	**内容基準**
□数学	
生徒は，庭を区切るのに役立つように，ものさしや巻き尺といった道具を使うことによって，計測する。	計測と幾何学：生徒は，それを測定するために，時間や単位の概念を理解する。
生徒は，庭床で道具と使うことによって，数の認識を理解し，植える種を数えるとき，数について精通するようになる。	数の感覚：生徒は，数と量の間の関係を理解する。(すなわち，その位置や配置に関係なく，異なる状況においてもある物体の数は同じである。)
生徒は，庭を区切るのを手伝う。	数学的な推論：生徒は，問題を設定する方法についての意思決定をする。使用されるべきアプローチや素材，方略を決定する。問題をモデル化するために，道具を操ったり，スケッチしたりする方略を使う。
知識	**内容基準**
□社会科／歴史	
生徒は「なぜ私たちは公園に行ったとき，ごみを拾うべきなのか」といった質問についてよく考える。	現在および昔についての学習やワーク：生徒は，確かな方法で行動することを含む，良い市民でいることを理解する
生徒は，「地域社会とは何か。誰が私たちの地域社会にいるのか。誰が物事を実行するのに必要とされているか」について話す。	現在および昔についての学習やワーク：生徒は，人々，場所，環境などの位置を比較したり対照したりし，そして，それらの特徴を記述する。
生徒は，プロジェクトの計画を通して，時間や空間について学ぶ（すなわち，「明日，あなたは託児所に行きます。道路の正しい側を歩き続けなさい。」と求める)。	現在およびずっと以前の学習やワーク：生徒は，カレンダーを使うことや適切な順序で日，週，月を配置することで，イベントを，時間的な順番に並べた。

知識	内容基準
□科学（理科）	
生徒は，植えるための苗床を用意し，庭をケアする方法を学ぶ。	地球科学：生徒は，地球が，陸や大気，水で構成されていることを知る。
生徒は，発芽のために種をまく。	生命科学：生徒は，植物と動物の外見や習性についての類似点や相異点を観察したり記述したりする方法を知る。
知識	**内容基準**
□芸術	
生徒は，『はらぺこあおむし』に基づく劇のための衣装を作る。	視覚芸術における創造，演技，参加：生徒は，オリジナルの芸術作品の意味や意図を伝達するためのいろいろなメディアを使用することで，芸術的な過程や技能を応用する。
知識	**内容基準**
□音楽	
生徒は，『はらぺこあおむし』に基づく劇のために，歌を暗唱する。	音楽における創造，演技，参加：生徒は，多様な音楽のレパートリーの演奏において，声楽や器楽の技能を応用する。

□市民的な取り組み

・生徒は，ふさわしい挨拶，おとなや仲間での礼儀正しい態度などを含む，適切に他者と交流する方法を学ぶ。
・生徒は，他者を意識する感覚を増加させる（すなわち，「もしあなたが他の人とぶつかったら，あなたは謝りなさい」というように）。
・生徒は，グループの議論の中で話すといった，グループにおける個々の行動による貢献または影響を認識する。
・生徒は，共有する方法，順番でする方法，挙手する方法，肯定的な言葉を使う方法などを学ぶ。
・生徒は，問題を通して，自主的に考える方法を学ぶ。教師は，「私に尋ねる前に，３人に尋ねなさい」というアプローチを少しずつ教える。生徒は，教師に話す前に，「私はこの状況で何ができるか」について答えを見つけ出すことができる。

□精神的な発達

・授業は，沈黙の時間で始まり，沈黙の時間で終わる。生徒は，静かな時間を尊重し，一日の始まりのいつもの行動を尊重する。

□その他

・クラスやその年のモットーは，勤勉と尊重である。生徒は，互いをケアする方法を学び，学校の文化に基づいて，互いのことを知るようになる。
・バディーリーディングプロジェクトや，地域の託児所とのパートナーシップのための主要な目的の一つは，幼稚園の生徒にリーダーシップの感覚を与えるだけでなく，生徒が就学前から幼稚園に行くための架け橋をつくり出し，共有するための知識をもっているという感覚を彼らに教えることである。

プロジェクトに関係する本	素材やリソース
・エリック・カール『はらぺこあおむし』Eric Carle, *The Very Hungry Caterpillar*	・蝶の飼育キット ・フラッシュカード ・庭用の道具 ・ヤードスティックや計量器具

サービスラーニングの計画段階（それぞれに生徒をかかわらせてください）

準備(PREPARATION)	実施(IMPLEMENTATION)
・教師は，第２学年および第４学年の教室の教師とのバディリーディングのパートナーシップを用意する。 ・教師は地域の託児所とのパートナーシップを用意する。	・生徒は，プロジェクトの期間中，バディとペアになる。 ・生徒はゴールデンゲート託児所に訪れる
振り返り(REFLECTION)	**実演とお祝い(DEMONSTRATION/CELEBRATION)**
・教師は，生徒に，非公式な振り返りの質問に答える。 ・毎週金曜日の朝，生徒は振り返りの記録を書いたり描画したりする。	・生徒は第４学年のバディと協働し，「よいバディになる方法」の本を編集する。 ・生徒は，『はらぺこあおむし』に基づく劇を演じる。

単元完了時の評価

生徒は何を学習したか？	証拠（サンプルや写真を貼り付けてください）
生徒は，良いバディになる方法を学んだか。	幼稚園児と第４学年の生徒によって編集された，「良いバディになる方法」の本やビデオ。
生徒は，協働する方法や良い役割モデルになる方法を学んだか。	実際のバディーリーディングプロジェクトにおける生徒の相互作用についての教師の観察。
生徒は，読み方や書き方を学んだか。	クラスのガーデニングの本の編集。

プロジェクトの評価

・家族や自分自身の重要性についての議論から単元を始めていたか。
・別の関連として，シーザー・チャベイス(Cesar Chavez)の重要性について話し，どのような方法で地域社会のリーダーが現れるかについての単元を含めていたか。

つけることができる。また，ここには示していないが，高学年では地域の人々を「教える」という視点がカリキュラムに組み込まれている。これは，「子どもは常に教育されるもの」という視点から脱却する大きな意味をもっており，彼らが市民として認めらるための重要な視点である。

Ⅳ　サービスラーニングにおける評価

現在，子どもたちのアカデミックな進歩を記録する方法は多く存在するが，その一方で，彼らの市民的な能力の発達を測定したり記録したりするための方法はほとんど明らかになっていない。EBCCチャータースクールの教師は，「市民的なリテラシー」を育てることを，学校の重要な使命と考え，外部のコンサルタントと協働し，それぞれの学年段階にふさわしい「市民的な取り組み」や「市民的なリテラシー」を確認している。確認された規準は，様々な市民的な技能や態度および行動を含んでいる。

ここでは，子どもたちの市民的な発達を測り，記録するために開発された，EBCCチャータースクールの「市民的なリテラシーのルーブリック」および「学びの履歴」[8]を紹介する[9]。

EBCCチャータースクールでは，より包括的で客観的な評価の体系を創り出すために，表のように教師が子どもたちに期待するリテラシーのルーブリックを作成している。アカデミックなリテラシーについてのルーブリックは，カリフォルニア州全体の内容基準に基づいて作成されているが，市民的なリテラシーのためのルーブリックは，教師が保護者とともに学年段階に適した市民的なリテラシーを確認し作成している。EBCCチャータースクールでは，「個人的な責任」，「他者や地域社会のケア」，そして「リーダーシップ」を育てたい市民的なリテラシーとしている。

表のルーブリックは，市民的なリテラシーについての学校全体の目標とともに，幼稚園段階の目標を示している[10]。「市民的なリテラシーのルーブリック」は，子どもたちに期待する市民的なリテラシーを学年ごとに明確にしている。この中には，２年間，あるいはそれ以上の年数をかけて身につけさせたいリテラシーも示されている。総合的な学習の時間については，育てたい子どもの力がはっきりしていない学校はまだまだあるのではないだろうか。あるいは，はっきりしていても，子どもや保護者との共通理解ができていない学校も多いと思われる。EBCCチャータースクールでは，「学びの履歴」の内容を必要に応じて修正し，すべての保護者が学校が育てたい子どもの力について理解できるよう，１年間に２回，成績表

表　市民的なリテラシーのルーブリック（幼稚園）

個人的な責任 責任のある行動 ・良識を働かせる ・行動を自己制御する ・自分の行動の責任を受け入れる ・行為がどのように他者に影響を与えるかについて気付いている	・刺激を少なくしたり，行動を自己制御したりすることができる ・反省的で，自分が何を，なぜしているかについて考える ・休み時間の間に，トイレを使い，水を飲む ・「正しいこと」についての意見をもち，報告する ・個人的な目的を設定し，達成する ・正直である ・敬意を表して素材を使う
ワークの習慣 ・課題を持ち続ける ・割り当てられた課題を完了する ・独力で取り組む ・最善の努力を示す ・指示を聞き，従う	・課題を持ち続ける ・授業や宿題で割り当てられた課題を完了する ・指図に従う ・少なくとも５分間独力で取り組む ・ワークを成功させることに誇りをもつ ・良い努力を示す
他者や地域社会のケア 他者への関心 ・敬意を表し，丁寧である ・感情移入を示したり，他者の見地を獲得したりする ・他者と協同したり，協働したりする ・進んで解決に取り組む	・敬意を表し，丁寧である ・他者と共有したり，他者を助けたりするといった友好関係の技能を実演する ・仲間と協同する ・他者に感情移入を示し始めたり，他者の見地に気付き始めるたりする
グループや地域社会への関心 ・教室や学校，より大きな環境に対する敬意を示す ・グループや地域社会の問題やニーズを確認することができる ・グループの成功が個々の成功と同じくらい重要であることを知っている ・行為がどのように他者に影響を与えるかについて気付いている	・教室の責任とニーズを知る
リーダーシップ ・問題解決の技能を実演する ・コミュニケーションの技能を実演する ・主導権を取る ・役割モデルとしての機能を果たす ・他者の意見にオープンである一方で，正しいと考えることを言うことができる	・他者と交流する主導権を取る ・問題解決の技能を実演する

図２　第３学年の「学びの履歴」（抜粋）

コアとなる教科	1回目		2回目		3回目	
	Con	Eff	Con	Eff	Con	Eff
話し言葉						
聞き方，話し方						
話し方の応用						
読解						
言葉の分析と語彙の発達						
理解力						
文学的な分析および応答						
書き言葉						
書き方						
書き方の応用						
書き言葉の慣習						
数学						
計算能力と数の感覚						
代数と関数						
計測と幾何学						
データ，統計および確率						
数学的の推論と問題解決						

市民的なリテラシー (－，✓，＋)	1回目	2回目	3回目
個人的な責任			
責任がある行動			
ワークの習慣			
他者やコミュニティのケア			
他者への関心			
グループやコミュニティへの関心			
リーダーシップ			

他の教科 (－，✓，＋)			
科学(理科)			
社会科			
音楽			
視覚芸術			

宿題 (－，✓，＋)			
完成させている			
期限を守って提出する			

を保護者に渡す際に配慮している。

そして，子どもたちの学習の評価をまとめたものが，図２の「学びの履歴」である。「学びの履歴」では，コアとなる教科，市民的なリテラシー，他の教科から宿題や出席にいたるまで数量的な評価を行っている。なお，図２では示されていないが，文章記述による評価も「学びの履歴」には含まれている。EBCCチャータースクールでは，これらすべてをまとめてサービスラーニングの評価としている。また，コアとなる教科については，「内容(Con)」と「努力(Eff)」の２つの観点から評価している点も大きな特徴である。

これまで，日本においては，市民的なリテラシーに関する評価は，教師一人ひとりの判断に任されてきた。総合的な学習の時間の評価については，「各学校で観点を定めて，評価を文章記述する」[11]ことになっているが，総合的な学習の時間で各学校が育てたいと考えている子どもの力を明らかにし，それらをできるだけ一貫性，客観性をもって評価するよう努めるべきである。この評価には，子どもの「努力」の観点からの記述が盛り込まれることが望ましい。

総合的な学習の時間の評価においても，ある単元で新たに身につけさせたいアカデミックな知識や技能について明示し，それについて評価することが，本当に教科等と関連付けられた総合的な学習の時間を実現させるための重要な要素ではないだろうか。

V　おわりに

ここまで，サービスラーニングについて，生活科や総合的な学習の時間における地域社会への参加に生かせると思われるプロジェクトや評価について論じてきた。しかし，これらをそのまま生活科や総合的な学習に適用するのは難しく，また，適当でない面もある。日本の学校や地域社会，子どもの実態に加え，学校の教育課程等に応じて適用することが望まれる。

さて，EBCCチャータースクールの教師は，サービスラーニングの実践にあたっての困難について，以下の点をあげている。

- 生徒が，幼すぎる，あるいは，サービスを実行する準備ができていないと判断される。

- 教師は，サービスラーニングのプロジェクトを計画し，学年段階のテーマを越えたコア・カリキュラムとサービスラーニングのプロジェクトを統合する全体計画を作るための十分な時間をもっていない。
- 教師は，地域社会のサービスラーニングのパートナーと接触する経験を制限してしまう。[12]

これらの課題は，生活科，総合的な学習の時間においてもしばしば問題としてあげられ，これらの課題から，生活科，総合的な学習の時間が非難を受けることもある。EBCCチャータースクールは，サービスラーニングに取り組み始めてまだ間がない。しかし，様々なことが要求される最初の年でさえ，これらの課題を教師自身が見つけ取り組んでいる。具体的な改善策を見つけることはもちろん重要であるが，子どもと一緒に有意義なサービスや学習のために精力的に取り組む教師の姿勢そのものを，我々は学ぶべきではないだろうか。

注

1）コミュニティサービスについては，「カリキュラムに基づいていないが，学校によって認められ，もしくは学校を介して行われる地域社会サービス活動」と定義づけられる。（中野真志「アメリカ合衆国」『生活のカリキュラムの改善に関する研究―諸外国の動向―』「教科等の構成と開発に関する調査研究研究」成果報告書(8)，国立教育政策研究所，2004年，７頁）

2）A Report From the National Commission on Service-Learning, *Learning In Deed.*, 2002, p. 15 この資料については，http://learningindeed.org/ から閲覧可能である。

3）例えば，以下のような先行研究がある。
- 宮崎猛「アメリカにおける『サービス・ラーニング』の動向と意義」『社会科教育研究』第80号，日本社会科教育学会，1998年
- 倉本哲男「サービスラーニングカリキュラム開発の理論と実践の検討」『アメリカ教育学会紀要』第13号，アメリカ教育学会，2002年
- 岡村千恵子「アメリカのミドル・スクールにおけるサービスラーニングに関する一考察―より高次の学習活動を指向するカリキュラムの展開過程―」『カリキュラム研究』第12号，日本カリキュラム学会，2003年

4）EBCCチャータースクール(http://www.ebcc-school.org/ebcc/)で使用されている『市民の参加としてのサービスラーニング(*Service-Learning As Civic Engagement: A Resource Guide for the Elementary Grades*)』については，カリフォルニア大学バークレー校サービスラーニング研究開発センター(http://gse.berkeley.edu/research/slc/index.html)の上級研究員メアリー・スー・アモン(Mary Sue Ammon)より頂いた。

5）East Bay Conservation Corps, *Service-Learning As Civic Engagement: A Resource Guide for the Elementary Grades*, 2003, p. 10

6）*Ibid.*, p. 11

7）*Ibid.*, pp. 37-40

8）原文は“Progress Report”であるが，内容を考慮して，「進歩の報告書」と直訳せずに「学びの履歴」とした。

9）『市民の参加としてのサービスラーニング(*Service-Learning As Civic Engagement: A Resource Guide for the Elementary Grades*)』には，幼稚園段階から第５学年までのすべての「市民的なリテラシーのルーブリック」が掲載されているが，「学びの履歴」に関しては第３学年のサンプルしか示されていないため，他の学年段階については明らかでない。なお，本小論では紙面の都合上，これらの資料は，筆者が訳したものを抜粋し掲載した。

10）East Bay Conservation Corps, *op. cit.*, p. 87

11）文部科学省初等中等教育局長による通知（平成13年４月）

12）East Bay Conservation Corps, *op. cit.*, p. 16（筆者訳・抜粋）